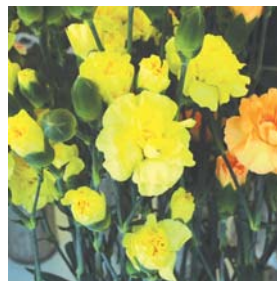


その後、明治42年ごろにスイセンなどの栽培が試みられ、明治45年にはベルギー製の板ガラスを使った8坪(約24㎡)の温室が設置されました。大正時代には生け花材料や草花、球根類と栽培品目も増え、大正13年



松田貞一翁顕彰碑

＊明治から戦中まで  
本市の花き栽培は、市制施行と同じ年の明治35(1902)年に黒髪町で始まりました。  
当時16歳の松田貞一さんが切り花、花壇用草花(アネモネ、ヤグルマソウなど)を栽培したのが始まりです。花き栽培発祥の地である黒髪町には石碑が建てられ、松田さんの偉業をたたえています。



花き栽培の歴史

には洋蘭(シペリペジウム)の栽培も始まりました。市内だけではなく武雄をはじめ市外へと行商で販路を広げていくなど、市の発展に合わせるように花き栽培も広がっていきました。  
昭和に入ると温室栽培の規模も拡大し、温室での展示販売の手法が取られるようになりましたが、戦争の影響で食料ではない花は作付けが制限され衰退していきました。

＊戦後、花き栽培の確立  
昭和24年には花き園芸愛好会が結成され、朝鮮動乱の特需景気で消費が拡大し、野菜から花き栽培へと移る人も増えていきました。  
カーネーションの栽培は昭和24年に黒髪町で始まり、その後各地区へと広がり、今に至っています。  
電照栽培のキクは、県外からの出荷品が佐世保花市場で高値で取引されたことから、早岐地区で栽培が始まり、次第に普及していきました。バラは昭和30年ごろに黒髪町で50〜60本植えられたのが始まりで、その後50坪(約165㎡)の温室栽培へと移り、本格化していきました。  
昭和33年ごろにはビニールハウスが導入され、スイートピー、ストック、グラジオラスなどいろいろな草花の栽培が始められ、各種部会組織が結成されたり、2代目後継者も就農したりするなど、年々花き専門の傾向が強まってきました。



カーネーション



ガーベラ



チュリップ



バラ

花き栽培の現在



＊花き栽培面積など  
平成8年度に約60ヘクタールであった栽培面積も、平成17年度には約73ヘクタールと増え、キクやバラ、カーネーションなどの切り花を110戸の農家で、シクラメンなどの鉢物を6戸の農家で生産しています。多くは県内をはじめ関西や関東など、全国へ出荷されています。

＊生産額など  
平成17年度の市内での花き生産量は、切り花で約2千3百万本、鉢物で約15万1千鉢です。  
平成16年度の本市の農業産出額は約69億7千万円で、そのうち花きの産出額は約11億1千万円で、米・野菜・果実・畜産とほぼ同じ割合を占めています。  
県内他市町村と比較しても、花き産出額では1、2を争うトップレベルの産地となっています。

佐世保の花を全国へ

生活に潤いと安らぎを与える花ですが、最近では「こころのビタミン」とも言われ、まちや家庭だけではなく、色々な場面を彩っています。嗜好の多様化に伴い、業務用や贈答用だけではなく生活空間をデザインするなど花の持つ役割は広く認識されるようになり、農業生産の中でもその位置付けは徐々に高まっています。

本市は、明治時代から花の栽培が行われている歴史ある「花のまち」です。現在では市内各地で伝統的な花のほか、オリジナル品種の開発や新しい栽培方法を取り入れながら、切り花から鉢植えまで多種多様な花が栽培され、全国に出荷されています。

今回は、切り花のブランド確立に取り組んでいる生産地などをご紹介します。

(上の写真は「第27回佐世保春季花の品評会」出品物)



去年10月に針尾小学校で行われたフラワーアレンジメント教室



＊花き栽培の現状  
最近輸入物が増加してきていることに加え、バブル経済崩壊以降の景気低迷の影響を受け、業務用の需要の落ち込みもあり、花き生産業界全体が厳しい状況下にあります。そんな中、優良品種を導入したり、多品種少量生産に切り替えたりするなど、生き残りをかけて生産者も努力を重ねています。  
これからは伸び悩んでいる個人消費の拡大が大きな課題となっています。佐世保花き園芸農業協同組合では、バラのチャリティー販売を20年前から毎年開催し、消費者と直接交流を図っているほか、市内の生花店と協力して、9年前から市内の小学校でフラワーアレンジメント教室を開催して、小さいころから花に親しみを持つてもらい、将来の消費者を育成する取り組みも続けています。